

『ちくま評論選』解説

11 聖なるヴァーチャル・リアリティ 西垣通

- 凡例 1 ●は、本文。①②：は形式段落番号。◆は、設問。
 3 ▼は、読解に関する技法。 4 2 ▽は、本文の追跡・分析。
 ☆は、記述に関する技法。

■前提 virtual は、本来「事実上の、実質上の」という意味（英文和訳のときには気をつけて！）。しかし、現在、慣例的に「仮想」という日本語をあてるケースが多い。ヴァーチャル・リアリティは、「ほんとはちがうけど、実質的には現実と同じ」という意味合いで「仮想現実」などと訳される。

■追跡

① ●電車のなかでウォークマンに聞き入っている若者たちの姿を見れば、二十一世紀のヴァーチャル共同体のありさまを想像することはたやすい。いまはズシリと重く不格好なヘッド・マウンテッド・ディスプレイも、やがて垢抜けした軽いサングラス型に変わるだろう。それを目に当てたとたん、人々は◆問1物質的な自己の姿を忘れ、するりとサイバースペースの中に滑り込んでいく。

▽たとえば、『**「脳コイル」**』というアニメでは、子供たちに**「脳コイル」**と呼ばれるウェアラブル（＝身につける）コンピュータが流行している近未来の姿が描かれていた。メガネはインターネットに接続されており、メガネをかければ、データ化されたバーチャルな景色を実際の景色に重ねて見ることが出来る。他に、米国映画『マトリックス』では、人類が、気付かないうちに仮想現実を現実と思いつまみ込まれている世界が描かれている。

問1◆「物質的な自己」とはどのような自己か。

☆**対比を利用する**。「物質的な自己」の対義語をチェックし、表現を借りてくる。②を見よ。対義語として「分身（疑似身体）」「仮想自己」という表現に気づく。「物質的な自己」とは、疑似身体ではなく、**「仮想自己ではない自己、つまり、（解答例）「本当の身体を持つ、現実の自己」ということになる**。仮想空間、サイバースペースに**「本当の身体を持つ、現実の自己」という意味を付加して、「本当の身体を持つ、現実空間にいる自己」と表現してもよい**。【参考】physical Ⅱ物質的なⅡ身体的な

② ●肝心なのは、サイバースペースを駆けめぐる分身（疑似身体）は自分とは全くちがうキャラクターの持ち主であってよい、という点だ。

▽**「肝心なのは」に注意**。「サイバースペースを駆けめぐる分身（疑似身体）」≠「現実の自分」。サイバースペースとはどういうものか。とりあえず、インターネットの中の世界を想定しておこう。ネット空間には、あたかも現実世界と同じようなコミュニケーションができるコミュニケーションが存在している。「サイバー警察」は、インターネット・コミュニティを介した事件を担当する部署として現実に活動している。

●人生に倦んだ老会社員が一七歳の少女の姿で奔放な恋をすることもできる。成績不振と失恋になやむ浪人女子学生がワンマン社長になって男どもに威張りちらすこともできる。

▽**具体例による理解**。
 ●自分の中の重く淀んだコンプレックスの沼で分裂懐胎した無形な仮想自己が、サイバースペースで他の疑似身体とコミュニケーションをおこない、「読解問題」1やがて**「社会的実体」に成長していくのだ**。

▽先の一文の具体例を、抽象的な表現でまとめたもの。両方の文を比較し、具体例を手がかりに理解するといいい。いつも、**「具体↓抽象、抽象↓具体」の關係に注意**。読解問題1については、終わりに考える。「自分の中の重く淀んだコンプレックスの沼で分裂懐胎した無形な仮想自己」なんていわれたら、なんだか難しいけれど、「少女に変身する中年のオッサン」とか「ワンマン社長になる女子学生」という「例」を見れば、現実のコンプレックス（劣等感）から抜け出したい、こうなりたい、という（願望）のことかな、と何となく理解できる。

③ ●批評家室井尚は、現代情報文明を鋭くえぐった著書『情報宇宙論』で次のように述べる。それは、つまり「別の自分」、「別の自我」の可能性が自分の中にあり、それがなんらかの手段で自分自身の手で実現できるかもしれないという、危険ではあるが非常に大きな魅惑がそこに存在しているということである。

▽**引用文は、それまでの文脈につないで理解**。サイバースペースに人々が引きつけられていくのは、別の自分になれるかもしれないという魅力があるから。この部分はそう読める。（ただし、危険でもある）。

●逆説的だが、こうした「別の自己」への欲望もまた近代的な人間主義から生じてきた欲望であり、一種の「解放」への意志に貫かれているのだ。すなわち、主体性そのものの限定からの出口がそこでは望まれているのである。

▽**「鍵語・『現キー』参照」逆説的**。ここは解説が必要かもしれない。別の自分になりたという欲望は、「近代的な人間主義」から生まれた。「近代的な人間主義」は、人間はだれもが、何かに隷属させられることなく、自由に自己実現を追求する権利を認める（日本国憲法に書かれているように）。しかし、現実の自己は、限定的だ。したいようにせよ、といわれても、自分がその主体性を発揮して真の解放を実現しているとはとても思えない。別の自分になりたい、という欲求は、「近代的な人間主義」のもつていた**「欲求の延長線上にあるが、同時に、「近代的な人間主義」の考えていたような人間（主体）を踏み越えていく現象である**。「逆説的だが」というのは、近代の延長線上にある（のに）、近代を超えていく、という意味で、そこに矛盾が含まれている様子をいっている。

④ ●自分の脳のさまざま可能性をさぐり、非日常的意識（altered states）に至ろうとする試みは、一九六〇年代の反体制ヒッピーたちが麻薬を使って盛んにやろうとしたことだ。いまその手段は麻薬からヴァーチャル・リアリティに移りつつある。

▽麻薬とヴァーチャル・リアリティは同じ目的のための手段？ 脳の別の可能性・非

日常的意識の獲得。アタマがくらくらしたり、変になっちゃいたっていうこと？

【参考】alter Ⅱ 変える、alternative Ⅱ 他の手段、state Ⅱ 状態、精神状態。

● 室井が直視するのは、電子記憶と身体記憶とが微細に入り交じり始めた現状なのだ。
▽ ちよつとよくわからない。次の文を読む。

● 事実、コンピュータ・ネットワーク上で展開されるサイバースペースでの体験は人々の身体記憶として蓄積され、それがまたコンピュータ・ネットワーク内部のデータ構造をたえまなく変えていく。

▽ 具体的には？ 次を読んでも書かれてはいないようだ。実感的に理解するには、「サイバースペースでの体験」が必要だ。しかし、私たちはあらゆることを体験しているわけではない。説明や例があれば、それを参考にすれば？ もし、あまり問題にならない箇所なら「保留」しておく。ただし、理解を「保留」したことはつきり印にしておく。例えば（？）もし、そこが設問に関係していたら？ ちよつと困るが、手はある。それは

▼ **文字どおりに理解しておく**、という方法だ。このなら、「サイバースペースでの体験」↓「身体記憶として蓄積」↓「コンピュータ・ネットワーク内部のデータ構造として蓄積（電子記憶）」。このような図式だけを取りあえず取り出しておくということ。

少し考えてみよう。サイバースペースを体験しているのは、現実の脳である。コミュニティ内の他の人と交流しつつ快感を感じたり怒ったりしている。それらは現実の脳に記憶される。だれかの書き込みに反応して、何かを書き込んだりするかもしれない。それは電子記憶としてネットの上に残る。ネットの上の私は現実の私とは違う、と、はじめのうち、現実の脳は思っているだろう。しかし、やがて、ネットの上での私の行動が蓄積され、ネットの上での私は一つの人格に成長していく。そのように成長させた仮想人格についての記憶は、現実の脳にも蓄積されていく。現実の脳には、現実の身体記憶と、電子記憶とともに成長した人格の行動の記憶が渾然と蓄積されていく。記憶の境目があいまいになり、どっちが私？という状態になっていく。

● **そこでは通常の記憶に支えられる「自己」の皮膚が溶けだし、触手を伸ばして「異なる存在」へと分裂変身していくのである。**

▽ イメージ的な表現だが、現実の自己がだんだん仮想の自己に変身していくさまが見て取れるだろう。

⑤ ● **だがいったいなぜ、われわれは「問2」別の自己「になりたいたいのだろうか？**

理由を決して、自分の可能性を広げるといっただけではない。近代社会で特権的な地位を与えられている「主体的な個人」とは、かなり窮屈なものである。「自由」というが、実際の行動はきびしい諸秩序のもとで管理されている。「平等」というが、実は地位・財産をはじめ多様な差異・差別が厳然として存在する。

▽ 問↓答。この問いかけの答えを追跡する。問2もそれを聞いている。▼ A だけではなくBも。not only, but also。「自分の可能性を広げたいから」だけではだめだね。とりあえず、「主体的とかさア、窮屈だからね」という答えをキープ。さらに追跡。

⑥ ● たえざる差異化によって欲望をつくりだし、生産―消費のサイクルを活性化していくのが、資本主義の基本原則というものだ。それはつねに敗者と挫折感を生み出しつつける社会ともいえる。自由平等が建前である以上、敗北は個人の努力・能力の不足のせいにならぬ。人々は黙って屈辱感を噛みしめなくてはならない。近代社会とは隠蔽された差別社会なのである。

▽ この簡潔な指摘自体が重要。近代のテーゼ（能力主義）は、前近代の（身分・封建主義）に対するアンチテーゼ（反対の主張）だったが、現実には生みだされているのは、格差、筆者のいう差別（格差）社会である。（答）を求めて、さらに追跡。

⑦ ● 「別の自己」が、こうした慢性的なフラストレーションから解放される手段となることに不思議はないだろう。

▽ 問↓答の（答）が見つかった。

問2 ◆ 「別の自己」になりたいたいのなぜか。
（解答例1） ▲ 「こうした慢性的なフラストレーションから解放されたいから。」
「こうした慢性的なフラストレーション」はいいかえたほうがいい。

（解答例2） 「現実の（近代の資本主義）社会の中で感じさせられる挫折感や屈辱感から解放されたいから。」

おそらく、期待されている解答はこれであろう。問いかけは、この答えを導くために提示されていたからだ。しかし、正確には、「自分の可能性を広げたいから」も含めるべきだろう。四〇字で、というなら、解答例2だが、もし、六〇字で、といわれるなら、

（解答例3） 「自分の可能性を広げたいからというだけではなく、社会の中で感じさせられる挫折感や屈辱感から解放されたいから。」
と答えることになる。「窮屈だから」の中身を詳しくいつていることになる。

● それは決して「偽の自己」ではない。もしかしたら「輝かしい分身」こそが「真の自己」ではないか、という思い込みをゆるすところに、「ヴァーチャルな身体」の真骨頂がある。「読解問題」2このときヴァーチャル共同体は近代社会の陰画となるのだ。

▽ 筆者はここで、仮想現実を肯定している？ 否定している？ 「真骨頂Ⅱ本来の姿」という語が使われていることから、この箇所に関しては、肯定論であることがわかる。読解問題2については、後で考える。

⑧ ● もし分身体験が人々に充足感を与えることができるなら、サイバースペースはとめどなく増殖しつつける近代社会の欲望の放水路となっていくだろう。このことは必ずしも悪いことばかりではないかもしれない。

▽ 肯定論が続く。▼ 意見の提示。「…だろう」「…かもしれない」といった表現に注意。こういう推量的な表現には、筆者の判断・推理・想定・意見などが込められていると見ていい。意見と事実の区別をしなさい、と習ったことはないだろうか。「だろう」「にちがいない

い」といった文末は意見表明、「である」「だった」は事実の言明であることが多い。

●欲望の充足は多くの場合、物質やエネルギーの消費をとまなう。先進国のエスカレートする欲望によって、現在、地球規模の環境破壊が起こっていることは万人が承知している。二十一世紀半ばには、世界の人口は一〇〇億を超え、さらに発展途上国の物質・エネルギー消費量も先進国並みに増えてくるだろう。破局が訪れないほうがおかしい。

▽欲望を現実から仮想現実に「放水」することがどうしていいのか。その根拠が具体的に示されている。いわゆる環境・資源・エネルギー問題である。▼先の意見表明に続く、その根拠の提示である。(意見(と思う)↓根拠(なぜなら))というのはワンスットの論理パツク。

⑨ ●それゆえ、もしヴァーチャル・リアリティによって、物質やエネルギーを大量に費やすことなく、欲望をみたすことができるなら、それは大いなる福音となる。問

3 ◆この点にヴァーチャル・リアリティの効能をみとめる声もよく聞く。

▽福音(ふくいん) 〓喜ばしい知らせ。英語ではゴスペル。

問3 ◆「この点」とはどのような点か。

ほとんど直前の抜き出しで処理できる。

(解答例1)「ヴァーチャル・リアリティによって、物質やエネルギーを大量に費やすことなく、欲望をみたすことができる点。」

しかし、もう少し長い字数で説明せよと要求されたらどうするか。全文の冒頭に「それゆえ」というつながりのことばがある。この部分の内容を補足した答案が可能だ。

(解答例2)「欲望の増進が地球規模の環境破壊を招いている現在、ヴァーチャル・リアリティによって、物質やエネルギーを大量に費やすことなく、欲望をみたすことができる点。」

●たとえば「海に見える広大な邸宅で美女を相手にテニスを楽しむ」といった夢想を、狭いアパートで疑似体験することもできる。いかに俗っぽく幼稚であっても、それは劣悪な住宅事情のもとで呻吟する人々にとっては切実な夢想なのだ。たとえ相手の美女が実はくたびれた中年男の分身であるとしても、それが白日のもとにさらされない限り、リアリティは損なわれないのである。

▽具体例による理解。ネット上で対戦ゲームをする場合など、端末の向こうの現実の相手がどんな人間なのかは、たしかに関係がない。

⑩ ●もちろん、物質を吸収排出する代謝系としての肉体が欲望の根源にある以上、サイバースペース体験が万能薬でないことは当然だ。人間はヴァーチャル・リアリティで満腹にはなれない。だが、人間の欲望は生物的欲求より高次のものである。「満腹」にはなれなくても、ご馳走の模倣によって「満腹感」くらいは得られるかもしれ

ない。

▽「読解ツール」譲歩表現。(もちろん↓だが)。いったん、もちろんだ、とか、たしかに、くだ、というふうにならぬ一般論を肯定しておいて、しかし、だが、と自分の判断を示していく論法。もちろん、重点は、逆接の後に来る。「かもしれない」も意見の表明を示している。

●人間の欲望がヴァーチャルだからこそ、ポルノ文学が存在するのだ。

▽根拠の提示。人間の欲望(とほ)ヴァーチャル(仮想的)なもの。人間の欲望の本質は、生理的な欲望を超えたところにある。生命維持や生殖のための欲求だけしかなかったのなら、人間は文明を生まなかつただろう。ポルノに限らず、あらゆる文化的現象は、本能的に欲求を超えた欲望が生みだしているものである。

●とすれば、ヴァーチャル・リアリティを駆使したサイバースペースが、二十一世紀に多様な欲望の解消装置として機能する可能性はけつして否定できない。

▽人間の欲望が文明を生んだとしても、その(欲望↓文明)が、すべての基盤である自然を破壊するならば、今や欲望とは厄介者である。サイバースペースがあらたな(欲望↓文明)の生息する場所になるのか。

⑪ ●とはいえ、だからこそ——次に述べるような危険もまた待っているのである。

▽文脈の転換点。「とはいえ」今までの肯定論からの転換を予告している。「だからこそ」肯定論と同じ理由で、異なった考え(否定論)が述べられていくことを予告。サイバースペースが欲望の生息地になったときの危険性? 予測して読んでいく。

⑫ ●欲望とは、ライバルとの競争や模倣といった社会的な人間関係から生まれるものだ。サイバースペースも一種の社会的リアリティをもつ以上、人々の欲望はそこで充足されるだけでなく、再生産され、増殖しつづける。人々はいつとき「別の自己」として現実世界でかえられぬ夢想・欲望をみたしても、ふたたび仮想世界のなかで新たな欲望の虜になっていくだろう。

▽「だけでなく」「だろう」というサインに注目して、要点をチェックしてみた。サイバースペース内で、欲望は「再生産され、増殖しつづける」、人は「ふたたび仮想世界のなかで新たな欲望の虜になっていく」。これでは、欲望はいつまで経っても充足されない。フラストレーション(欲求不満)は残ったままだ。

⑬ ●忘れてはならないのは、サイバースペースで拡大再生産されていく欲望が中立無垢なものではない、ということだ。そこは大小さまざまな権力の渦巻く場所であり、欲望もまた問4◆操作・統御されずにはいない。

▽「忘れてはならない」重要な指摘であることを示している。「欲望が中立無垢なものではない」とは? 「欲望もまた操作・統御される」という指摘と対比されている。

るはずだから、「個人の欲望が自然に純粋に発達していくのではない」、とっているのだとわかる。では、だれが操作するのか？ 「サイバースペースに渦巻く、さまざまな権力」というのが筆者の指摘である。かなり、否定的な議論になってきた。

問4 ◆「操作・統御されずにはいない」のはなぜか。

まず☆傍線部延長をする。実質的な問いは、「(サイバースペースでの)欲望が、操作・統御されずにはいない、のはなぜか」となる。

☆端的に直前を使って「そこは大小さまざまな権力の渦巻く場所だから。」と答えることができる。「そこ」とは？ 「サイバースペース」。もう少し詳しくいうなら「欲望が拡大再生産されていくサイバースペース」。

(解答例1) 「欲望が拡大再生産されていくサイバースペースは、大小さまざまな権力の渦巻く場所だから。」

しかし、この解答では、「大小さまざまな権力が渦巻く」とはどういうこと？と問われる可能性がある。じつは、この後、⑭⑮⑯で、サイバースペースで「権力」がある種の力が働く様子が論じられる。その内容を盛り込んだ答案にする方が上等。先取りして見ておこう。

⑭ コンピュータによるモデル化によって、仮想世界は強制的に意味づけられている。

⑮ すべてをコストで測る資本の論理によって、仮想世界は支配されている。

(解答例2) 「欲望が拡大再生産されていく仮想世界は、コンピュータによるモデル化やすべてをコストで測る資本の論理によって意味づけられ支配されているから。」

⑭ ●サイバースペースは、コンピュータ・グラフィックスやビデオ映像で合成された仮想世界が網状につながれて構成される。すでに述べた通り、この仮想世界は現実世界を一つの平面に写像し、粗くモデル化した仮構にすぎない。ここでは、かぎりの細部をふくむ現実世界の豊饒さは失われている。

▽「すでに述べた通り」とあるが、それは、おそらくカットされた部分にあつたのだろう。「現実世界を一つの平面に写像」といった表現に実感が持てる人とそうでない人に分かれるだろうが、とらえにくい場合でも、最低限、「仮想世界は現実世界を粗くモデル化した仮構」「仮構には、(かぎりの細部をふくむ) 現実世界の豊かさはない」という点をおさえること。

⑮ ●念のためにつけ加えると、じつは「現実世界」そのものが一つの仮構・擬制である、とも言えるだろう。個々の人間の身体は「自分にとって意味・価値のあるもの」を環境から切り出し、「図と地」に分けて恣意的に「自分なりの世界」をつくる。万人共通の「現実世界」という仮構・擬制は、身体どうしの社会的・権力的な関係から織り上げられていくわけだ。

▽この部分は、「仮想世界は現実世界をモデル化した仮構」という本論の補足。擬制(ぎせい) 〓 実在しないものを実在と見なすこと。Fictitious (フィクティシヤス) 〓 架空の。私た

ちは、見るときも、聴くときも、すべてをとらえているのではなく、自分にとって意味のあるものだけを見、聴いている。「ルビンの壺」に壺を見るか、人の横顔を見るかは、どちらでとらえるのが自分にとって意味があるか、ということに入れ替わる。ただし、一人のとらえ方だけで世界像が決まるわけではなく、みんなが「あれは壺だ」という世界にいる私は、(知らない間に)それを壺と見るように方向づけられる。そうだったら、もう、「顔」のほうは見えなくなるのである。「現実世界」の像は、周りとの関係から形成されていく。

●だがここで肝心なのは、コンピュータによるモデル化がそういう仮構・擬制の生成基盤そのものに決定的な偏向(バイアス)をかける、という点なのである。端的に言う、「モデル」化とは、環境世界をいわば強制的に「意味」づけしていくことだ。

▽「逆接」だが。肝心なのは、「コンピュータによるモデル化」↓「仮構・擬制の生成基盤そのもの」に「決定的な偏向(バイアス)」をかける」↓「仮想現実の成り立ちに決定的な影響(かたより)を与える」。「モデル化」環境世界を強制的に「意味」づけること。「現実世界」は身体どうしとの関係から織り上げられ、「仮想現実」はコンピュータによるモデル化によって織り上げられていく。

⑯ ●さらにサイバースペースをつらぬく一つの基軸に着目しなくてはならない。それは「数量化」であり、すべてが「コスト」に換算される資本主義の基軸である。

▽①「コンピュータによるモデル化」、②「すべてが「コスト」に換算される数量化」。

●サイバースペースがコンピュータ・ネットワーク上で展開されるからには、そこを往来するすべての情報には一ビットごとに値段がついている。サイバースペースにうごめく人々の欲望は無料ではない。それはコンピュータ・ネットワーク建設・維持コストを回収し、さらに巨大な利潤をあげるための水路に導かれていくはずだ。

▽具体例による理解。例えば、ネット上のいろんなシステムが、一見「無料」で使えるのはなぜか、を考えてみればいだろう。そこには、「広告」や「有料」への誘導が巧みに隠されている。例えば、特定の語を検索する人の欲望をシステムは予測して、消費に誘うための広告を提示する。

⑰ ●「読解問題」3 サイバースペースとは、あくまで弱肉強食の資本主義的空間である。それが無条件に、「地球市民の民主的討論の広場」になるとか、「自然環境を汚すことなく欲望を充足させる社会的装置」になるとかいった電脳ユートピアの楽観論は、あまりにナイーブすぎると言わねばならない。

▽ナイーブ〓純真、素朴。何も考えてない、何もわかってない、というニュアンス。終わりはサイバースペース否定論。筆者の西垣通は、インターネットについての慎重論の論客といっていだろう。一方、梅田望夫(『ウェブ進化論』ちくま新書)など

は、楽観論の代表。読み比べてみるといい。

■読解問題の解法

1やがて確固とした「社会的実体」に成長していく、とはどういうことか。

☆問いのところを直し。「何が、どのように、何に、成長していくのか」というふうに問いを整理。

☆なんやそのままだんか式。文中のことはそのまま使って、とりあえず、文をこしらえる。

①「①(自分の中の重く淀んだコンプレックスの沼で分裂懐胎した無形な仮想自己)が、

②(サイバースペースで他の疑似身体とコミュニケーションをおこなううちに、

③(確固とした「社会的実体」に成長していく、ということ)。」

もちろんこれではだめなので、①②③といいかえていく。

①自分の中の劣等感から生まれた、現実の自分とは違う仮想的な分身は、

②仮想世界の中でコミュニケーションをおこなううちに

③仮想世界の中で人間関係の中で確かに存在し、独立した人格を持った存在になっていく。

架空の分身がちゃんとした存在になるという変化を際立たせるには、①と②の間に、

①▽初めは確かな人格も持たず、確かに存在しているともいえない状態だが、と入れてもよい。()内は省略可能。

(解答例)「(自分の中の劣等感から生まれた、)現実の自分とは違う仮想的な分身は、(初めは確かな人格も持たず、確かに存在しているともいえない状態だが、)仮想世界の中でコミュニケーションをおこなううちに、仮想世界の人間関係の中で確かに存在するようになり、独立した人格を持った存在になっていく、ということ。」

2このときヴァーチャル共同体は近代社会の陰画となるのだ。とはどういうことか。

☆切り身の方法。いくつかに分けて、それぞれをいいかえ。「このとき/ヴァーチャル共同体は/近代社会の陰画となる」。ただし、ヴァーチャル共同体はいいかえにくい。ポイントは「このとき」の指示内容と「陰画」という比喩のいいかえ。

「このとき」の内容は直前に。「輝かしい分身」こそが「真の自己」ではないか、という思い込みをゆるすとき。もっとかんとんに「別の自己」こそ「真の自己」だと思つとき」といえる。

「近代社会の陰画」とは？ 陰画とはネガ・フィルム。明暗や色が反転している。これを紙に焼いて写真にする。つまり、陰画とは何かの「反転」のたとえである。⑥に「近代社会とは隠蔽された差別社会」とあった。その反転とは「差別のない解放された社会」ということになる。これらを使って組み立てる。

(解答例1)「別の自己」こそ「真の自己」だと思つとき、ヴァーチャル共同体は、隠蔽された差別社会である近代社会を反転させた差別のない解放された社会となる、ということ。」

現実と仮想現実という関係をクリアにするなら、

(解答例2)「別の自己」こそ「真の自己」だと思つことによって、ヴァーチャル共同体は、本当は差別社会である現実の社会を反転させた、差別のない「解放された」もう一つの現実となる、ということ。」

差別、という語を使わないで、「慢性的なフラストレーション」↓「それからの解放」などを使つてもいい。この問いは、「反転」とか「裏返し」といったことばを思いつけるかどうかが鍵。

3サイバースペースとは、あくまで弱肉強食の資本主義的空間である、とはどういうことか。

☆構文を決める。「サイバースペースとは、こういうことが生じている場所である、ということ。」というふうに、答案の形をまず決めておく方法。そのあとで、内容を考えていく。

仮想世界では、弱肉強食が起きている、つて？ 力の強いものが弱いものを犠牲にして生き残っていく、というのが弱肉強食だろう。これはすなわち資本主義の論理である。字義だけでいいかえるなら、

(解答例1) △「サイバースペースとは、力の強いものが弱いものを犠牲にして生き残っていく資本主義の論理に支配された場所である、ということ。」

しかし、これでは本文の議論が十分にふまえていない。本文で、資本の論理とサイバースペースでの欲望の関係が論じられていたのは⑥。「サイバースペースでの欲望はすべてが(コスト||数値||お金)に換算される」という指摘であった。

(解答例2)「サイバースペースにおいても、欲望はすべてお金に換算され、現実世界同様、力の強いものが弱いものを犠牲にして生き残っていく資本主義の論理に支配されている、ということ。」

■論述への挑戦

二〇〇八年頃「仮想世界セカンドライフ」が、話題となったことがある。日本版のサイトでは次のように自己紹介していた。

「バーチャルワールド Second Life は、すべてユーザーが創造し発展させてゆく、永続的な3Dオンラインスペースです。巨大で急速に拡大していくこの世界では、想像できるあらゆるものを創造し実現できます。」

また、ここでは現実のお金も動いている。ある記事はこういつている。

「企業が、Second Life に期待を寄せる理由はいろいろである。しかし、中でも魅力的なのは、この仮想世界の中ではすでに巨額のお金が日々動いているという点だ。Second Life 内では、リンデンドル (L\$) という通貨が流通しており、それでアイテムなどを売買したり、労働の対価を得たりすることができる。1米ドルは、変動相場で決まるレートにより約270L\$と交換できる。」

問。「セカンドライフ」などについて調べ、仮想世界のあり方について、考えを述べよ。